意 見 要 旨

第４回　えきしろ空間活性協議会

日時	２０２６年１０月９日(金)
場所	松本市中央公民館（Mイング）３階　大会議室３－２
出席者	

区分	所属団体	役職	氏名（敬称略）	出欠
有識者	清泉女子大学	学長・教授	山本　達也 （座長）	出
	東京大学	副学長・教授	出口　敦 （副座長）	出*
	信州大学	講師	李　賢郁	出
商業・経済	松本商工会議所	会頭	清水　是昭	出
公共交通・観光	アルピコ交通株式会社	代表取締役	小林　史成	出
	東日本旅客鉄道会社	長野事業本部長	下大薗　浩	出
観光	松本観光 コンベンション協会	会長	齊藤　茂行	出
文化芸術	㈱あをぐみ	取締役	大輪　俊江	出
サービス業・イベント	松本商店街連盟	副会長	花岡　由梨	出
宿泊	全国旅館ホテル 生活衛生同業組合連合会	青年部 未来事業担当副部長	小林　篤史	出

*オンライン出席

議題	１　開会・挨拶 ２　議題 ⑴　第３回えきしろ空間活性協議会の意見等に対する対応方針の報告【資料１】 ⑵　えきまえエリアビジョン素案に対する協議【資料２】 ３　報告 ⑴　松本駅交通ターミナル機能強化構想　策定状況 ⑵　（仮称）デザイン指針　策定状況 ４　閉会

■意見要旨

○議題(1)～(2)に対する質疑・意見

No.	意見等要旨	意見等に対する説明
1	・地域関係者の現状の懐事情が逼迫しているため、ビジョン策定後の財政支援や土地区画整理に準ずる支援策を明確に持ち、再度市民にヒアリングや説明が必要と感じる。 ・駅前のトランジットモールの計画について、現状のバスの相互通行や路上駐車を考えると、車道幅を狭めた際、渋滞が発生する懸念があり、観光客への不便が生じるという意見がある。	－
2	・市の財源だけでなく補助金も大切であり、この原資・種類・活用方針を明確にしないと絵に描いた餅になる。その上で、市民に何を負担してもらうのかを記載すべきである。目標年次については、２０年後では危機感が薄れるため、１０年として動くべきである。	・ビジョンでは、１０年以内に着手・実現する取組みを記載している。補助金については未確定だが、ウォーカブル区域を定めた場合、推進に係る取組みに対して補助金が付く制度等がある。
3	・ビジョンの位置づけと発行主体を確認したい。えきまえエリアビジョンは、「松本駅周辺交通ターミナル強化構想」や「(仮称) えきまえエリア空間デザイン指針」の上位に位置する計画なのか。また、発行主体が市なのであれば、市の覚悟を記載すべきである。	・えきまえエリアビジョンは他の２計画を包括する位置づけである。ビジョンの発行主体は市であり、取組方針に具体の記載をすることで市の覚悟を示したと考えているが、記載内容をさらに検討したい。
	・Chapter２とChapter３の接続が不十分である。Chapter３に記載のあるパブリックスペースの創出、ウォーカブル空間の創出などに繋がる課題認識がない。前回までは交通面も含めた課題が明記されていたが、今回は現状という記載になったため、各取り組みの必要性が不明である。	・Chapter２とChapter３の接続については改善したい。 ・Chapter１【3】でエリアの現状と表現を和らげているのは、地域の方との意見交換の際、課題と感じていない声が多かったためマイナスとなる受け止めをされないよう表現した。課題感が分かるように記すべきところは検討する。

No.	意見等要旨	意見等に対する説明
	・エリア全体の目指す姿がエリア固有のものではなく、もっと広範囲の目指す姿になっている。駅前に特化した道路交通の課題が示されることで、Chapter３にもつながっていくと考える。	・えきまえエリアの目指す姿について、えきまえエリアは市全体でも重要な場所であり、地域全体を見据えて取り扱っているため、周囲と必ずしも切り分けることができない。宿題として再検討する。
	・各界隈の目指す姿の示し方について、社会実験で確認したポテンシャルを記し、そのポテンシャルを実現するために目指す姿のパースを掲載すべきである。そうでないと、社会実験の位置づけが不明確である。 ・パースは、似たような絵になっていて分かりにくく、文章での説明がないと理解が難しい。	・各界隈の目指す姿は、冒頭にパースを配置して目指すパブリックライフを視覚的に示し、社会実験結果は、補足資料的な意味合いとして最後に示した。 ・パースの説明について、絵だけで伝えることは難しいので、文章で説明することも検討していく。
	・７つの取組み方針について、行政と民間の役割をはっきり決められないものは記載しなくてよいのではないか。	・７つの取組み方針は、主に行政・民間の役割として記載している。明確に役割を分けられるものは強調し、公民が連携していく取組みであれば、表現を検討していく。
４	・えきまえエリアは、市民・観光客・事業者など多様な人が関わることを前提にすべきだが、参考資料を見ると、声の抽出は市民が中心であり、事業者の声が十分に集まっていない。p.51、目標は簡潔に記載されているが、ぱっと見で分かりにくい。 ・民間投資を呼び込むと記載があるが、次ページ以降でそれに該当する箇所が見えにくい。細かいが、セットバックの記載は、二つ目の「・」と三つ目の「・」の記載の順番は逆ではないか。Chapter３を補足する必要がある。	－

No.	意見等要旨	意見等に対する説明
5	・４つの界隈間の回遊性向上の記載があるが、具体的な手段を Chapter３に記載した方がよい。 ・P.55 において、大学等の学びのスペースをパブリックスペースの文脈に入れられるとよい。 ・p.56 既存建物の更新支援は、規制緩和や財政支援など具体的な内容を踏み込んで記載してほしい。 ・p.59 公民学の役割に、市民の役割があってもよいのではないか。	－
6	・p.30 の４つの界隈は、具体的な場が分かるよう地図上で明示すべきである。 ・各界隈の目指す姿は、界隈の説明からパースに移った方が理解しやすいだろう。 ・p.53「通過交通を分担する道路」「車中心から人中心へ転換するエリア」はより前面に出し、市の覚悟としてウォーカブルなまちなみへの強い姿勢を示してほしい。	－
7	・p.53 松本が目指すウォーカブル度合いが中途半端になると、誰に対してもよくない結果になる。自転車は抑制の対象なのか等の位置づけも確認したい。松本でウォーカブルを考えると、自転車のニーズが出てくる印象もある。全国で人口減少が進む中、松本でなければならない特徴を前面に出さないと、他都市と同様に衰退する可能性がある。 ・駅前記念公園界隈というまちなかに、居住者がいることは大きい。グリーンインフラの維持には住民が必要である。一方で、暮らす人が増えると、エリア全体の交通量がかなり増えることが想定される。市場原理から住宅が増えることに対し、今後は車に頼らなくても暮らせるまちなかの環境づくりや、日常の食料品等へのアクセス確保が重要である。 ・えきまえエリア全体を公園として位置付ける発想もある。まちなかの至るところに溜まれる機能があるなど、踏み込んだ内容を実践することで、将来的な評価に繋がるのではないか。	－
8	・中部縦貫自動車道の整備の進展により、観光のインバウンド需要が増加している。観光ビジョンで検討したが、車の流入ルートを考え、車のまちなかへの集中を防ぎ、オーバーツーリズム対策をしてほしい。 ・社会実験で向上した界隈の価値をさらに向上させるため	

No.	意見等要旨	意見等に対する説明
	に、民間と一緒に方法を考える必要がある。 ・インフレの加速により財政的に建替えが難しいため、建物建替えについてビジョンに記載してほしい。細かいことは刻々と変わるため、ビジョンには大きな方針を記載すべきである。ビジョンは大きな絵が描かれており、徐々に色を塗っていくのがよいだろう。ビジョンを市民に理解してもらえるものとなるとよい。	－
9	・社会実験は、開催場所のみが盛り上がり、周囲への波及がない。４つの界隈間の回遊や松本城三の丸エリア、あがたの森エリアとの回遊性の向上は目指す姿に入っていないため、各界隈だけで解決しようとしているように見える。イベント依存の実験ではなく、日常的な実験も必要であり、全国出店のキッチンカーよりも地元飲食店が出店した方が魅力的である。 ・中町の理事にえきまえエリアビジョンの意見を伺うと、絵に描いた餅になっていると意見がある。住んでいる人が考えたビジョンではないため、未来像に対する実感が湧かないとのことである。事業者や居住者は、自らの生活がどのように変化するのかを懸念している。住民目線でビジョンを作る必要がある。 ・取組方針①の図には中町が入っているが、③④は拠点となっていない。中町が蔵のあるまちで、善光寺街道で１００年以上続く商店街ということを加味すれば、いずれにも該当するのではないか。	－
10	・Chapter３【2】の方針の掲載の順番は、論理的に考えるとよいだろう。えきまえエリアを利用する上では、②円滑な交通ネットワークによりえきまえに来やすくなった上で、③水・緑や歴史を尊重したウォーカブルな空間を歩き、①魅力的なパブリックスペースでパブリックライフを送るという順番ではないか。 ・観光や働く人向けの松本でしか体験できない高付加価値滞在の要素が現状薄いため考えるべきである。 ・７つの取組み方針は長すぎるので、５～７は、バックアップ的な位置づけとしてコンパクトに整理してはどうか。	－
11	・松本での移動は、自動車を前提と考えていたが、現状でも高校生は電車等の公共交通機関で訪れているため、大人も公共交通機関で訪れることは可能である。松本駅周辺は、	

No.	意見等要旨	意見等に対する説明
	電車とバスで来る場など前提をどのように設定し、どこまで踏み込むのかが重要である。 ・大学はフィールドを求めている。p.59 の大学の役割には、信州大学に限らず国内外の大学が松本にコミットできる仕組みや学びの場を検討すべきである。	－
12	・公共交通は、利用者がいないと成立しない。現状、利用客は減っている点に課題がある。公共交通だけでは全ての交通を賄えず、高齢化が進む中での安全性確保の観点からも、自動運転技術等を見据えた次のフェーズに移行しないといけない。２０年先を見据えるのであれば、新交通モードを受け入れる覚悟をビジョンに示すべきである。松本に人が来て公共交通を利用するという前提と、市民へ伝えるためのストーリーが必要である。	－

以上